

白夫人の戀

老舎小説全集 5
駱駝祥子・満洲旗人物語

1981年11月1日 初版発行

定価 2400円
訳者 竹中伸
発行人 鈴木泰二
編集人 大山治義
印刷所 壮光舎印刷株式会社
製本所 株式会社国宝社
発行所 株式会社 学習研究社
(〒145) 東京都大田区上池台4-40-5
振替・東京8-142930番

☆この本の内容・製本などに関するお問い合わせは、下記あてをお願いします。
文書は、東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)
学研お客さま相談センター「老舎小説全集」係
電話は、東京(03)720-1111(大代表)

本書内容の無断複写を禁じます。

© GAKKEN

Printed in Japan

0397-165 255-1002

小 説

白 夫 人 の 恋

完 訳 ・ 白 蛇 伝



張 恨 水 作
常 石 茂 訳

河 出 新 書

訳者略歴

本名、柳沢三郎。一九一五年大阪府に生る。満六歳、官営八幡製鉄所理事たりし父が、出勤途上鉄道事故のため急死し、一家上京す。麻布三河台小学校、東京市立一中を経て浦高文乙に入学。『麵麴』同人たりし神保光太郎氏の指導を得て同人雑誌『部落』を刊行、初めて常石茂の筆名を用う。

一九三七年、東大中国文学科に入学。在学中陳青之著「近代支那教育史」(生活社)を訳出発行。中国文学研究会にも関係す。一九四〇年同科を卒業、北支開発に入社、北京に赴任す。その後、読書新聞編集、東大助手、立教大学予科教授を経、転身して出版界に入り一九四七年より五年間日本出版協同株式会社取締役、後独立して現代思潮社を創設したるも満二年で停業。この間に日本歯科大学予科に二年程出講せることあり。現在は窮命中。

目次

一	清明の佳節に雨繁く……………	六
二	美わしくまどかな縁 ^{えにし} ……………	一七
三	夜話……………	三〇
四	永の暇を告げて……………	四〇
五	診ればかならず病を治す……………	五〇
六	道士を雲南へ流す……………	六〇
七	私には信じられない……………	七二
八	端午の異変……………	八三
九	崑崙に仙草を盗る……………	九二
十	関係のなかった托鉢の和尚……………	一二三

十一 闘うより礼を先にする白素貞……………二二

十二 築堤水闘……………二〇

十三 断橋のめぐりあい……………二四

十四 嬰兒誕生……………四六

十五 歡を尽して散ず……………五六

十六 混フシ元マテン孟モイ鉢……………六五

十七 塔に哭く……………七四

十八 白素貞出で来る……………八六

あとがき……………九六

白夫人の恋

——完訳・白蛇伝——

一 清明の佳節に雨繁く

清明（春分後十五日目）の時節は、江南には雨が多い。みわたすかぎり雲がなく、中天にうらうらと陽がかがやいていても、たちまち黒雲がわきおこつて、盆をくつがえしたような豪雨がザツとふりそそいでくる。だから遠出をするものは、万一の用意に傘をもつてゆくのが習いだった。この日はちょうど、清明の佳節だった。朝はやくから一点の雲もなく、空にかかつている太陽は、大地をてらして黄金一色にしていた。その光が中庭や、上手の長屋に射しこんでいる。と、そこへ、長屋からひとりの青年がでてきたが、黒い頭巾をかぶり、藍色の服を着、右手には金銀の紙錠（供養のため）（に焼く紙銭）をもちながら、ほかに、鞭爆（爆竹をつなぐ）（爆竹をつなぐ）や蠟燭をはじめ、墓参用の品物までを竹籠に入れて下げ、左手では雨傘を肩にかついでいる。

かれは中庭のなかほどまでくると、窓のほうへ向つて云った。

「じゃ、みなさん、ちょっと行つてきます。きのう番頭さんから一日お暇をいただいたんで、きょうは清明節ですから、南山まで両親の墓参りに行くんです。遠方なんで多分帰りがおそくなりますが、お店のほうはよろしく願います」

部屋のなかで、誰かが、

「許仙（ジューシン）どん、きょうはお暇をもらったんだから、心配しないで行つといいで！ そんなに云わなかったって、お店のほうは、わたしたちがひきうけるよ。でも、きょうは上天気なのにサ、どうして傘をもつてゆくんだい？」

「いまは陽がでるけど、午後から天気が変わるかもしれないのでね。それに、近頃はとても暑いから、屋頭になったら、照りつけられてかなわないでしょう。傘をもつて行って、みちみち日除けにしてもいいんですよ」

「それもそうだね。じゃ、気兼ねせずに行つておいでよ！」

そこで許仙は、いそぎ足で店の門を出た。小僧がふ

たりで、店の品物をいそがしそうにかたづけしていた。大通りでは、どの店もや々と戸をあけたところだった。幾つか通りを越して、清波門外までやってきた。

ここは西湖に面した船着場で、十艘以上の船が並んでもやっている。俗に瓜皮艇子と云われている船で、せいぜい二三丈の長さだ。そのなかに、四本の柱をたてて苦をかけ、下にはもう人がいっぱい乗っている一艘があったが、これが渡し船だった。

許仙は船着場へ下りて、その船に乗り、お互に譲りあつて座席があくと、腰掛板に腰を下した。許仙は葉屋の手代だったから、ふだんはめったに城外へ遊びに出られない。きょうは朝早く城外に來たので、三方の山がこの西湖をとりかこみ、杭州城外のさわがしさを遮っているのに気がつくのだった。蘇堤と白堤の楊柳や雑木の並木路が、湖心へつき出し、こちらから向うへ、その木立を徐徐に山の麓まで引いている。二つの高峰は、椅子の肱つきのように、遠くから延びてきて、杭州城を抱こうとしているかのようだ。西湖の水はもとと青く澄んでいるから、遠く近く峰峰を照して、

さかさまにその影を水中に映し、ことのほかの絶景である。

許仙は思わず感歎の声をもらした。

「なんて綺麗な景色だろう！ 城内のひとは、一日じゅう、薪だ、米だ、油だ、塩だと、くだらぬことにかまけていて、この景色を楽しみにくる暇もないけれど、ほんとに惜しいこったなァ！」

すると、そばにいるひとが云った。

「あなたも暇をつくつて、四五日遊びにきてみるといいですよ。四五日くらいの暇ならきつとできるでしょう！」

許仙はそうですねと云って、しきりに背いた。まもなく船が動きだし、両側の木木をはじめ、高樓や亭閣も、ゆっくり動いてゆくのが見える。許仙は、西湖の景色はほんとにいい、きょうは墓参りを早目に切上げ、もし西湖へ早く戻ってこれたら、しばらく遊んでから城内へ帰ってもかまうまい、とおもった。

許仙はこんなつもりだったので、そのとおりささと墓参りからひきかえし、湖畔へ戻ってきたのは、ま

だ申の刻(午後三時—五時)だった。きょうは用事がなかったから、まず小さな茶店をみつめて、茶を一ぱい飲み、足を休めると、やがて傘をもち、道についてぶらぶら歩いて行った。

この西湖は、春と秋には人出でにぎわうのがないだが、きょうはその上清明の佳節なので、遊客がまるで蟻の這うようであった。この遊客の中には、馬にのるものもあり、小さな駕籠にのるものもあり、歩いてゆくものもあったが、後から後からひきもきらない。許仙はひとりで西冷橋サイレンヂョウまでやってきた。見ると、一帯の柳が湖の入江をかかえ、その入江に石橋がかかっている、孤山に通じている。

ちやうど許仙が橋を渡ろうとしたときだった。きゅうに東風がサッと吹き過ぎて、柳の枝を分けていった。その木蔭には、二人の乙女がならんで佇んでいた。ひとりとは年の頃十八九、上には白綸子の衫子(ひとえ)をまとい、下には白綸子の裙子(チユンヌ)を(スカート)をつけている。しかし服は紅い色のものを着ていた。もうひとりのほうは十六七で、青い衫子、青い裙子、全身青づくめだった。

た。なにやら通りがかかるひとびとを指している様子。許仙は生真面目な青年だったので、うつむいて通り過ぎた。

すると、白い服の乙女が、ツと指で二度空を指した。と、これは不思議、橋を渡るか渡らぬ間に、にわかに黒雲が湧きおこって、どこからともなく飛んでくると、またたくまにグングン拡がって、空を覆い、陽の光をまったく遮ってしまった。許仙が頭をあげて空を見まわしてみると、雲は南北の二高峰すれすれに垂れさがっている。そちこちの木の葉が、風に吹かれてザワザワ鳴る。着ている服もはためきだした。やれやれ、すぐ嵐がくるぞ！ 雨宿りする場所を探さなければ！ そこで許仙は両足に力を入れ、湖に沿ってまっすぐに歩いて行った。

ところが、見ようによつては、この吹き降りは妙だった。雨がまるで獺犬が獲物をかりたてるように、うしろのほうから吹きつけてくるのだ。だからひとびとはこの豪雨に追われて、自然、前へ前へと夢中で駆けだしてしまう。山に遊んだり、船を浮べていたひとび

とは、いっそうごった返して逃げまどつていた。許仙はさっそく傘をさすと、木のあるところへ駆けこみ、木蔭をぬって道を急いだ。

林の外側は西湖だった。西湖はちょうどひとしきりの豪雨に見舞われていて、湖上には青い靄がわいていた。空からふりそそいでくる雨は、ひとふりごとにはげしくなり、宝玉をちりばめた幔幕みたいに垂れ下つてきて、湖中の風景がどんなだか、スッカリ遮ぎられてよく見えず、ただひとかたまりの黒い影があるばかりだった。許仙は豪雨にたたかれるので立ち止つてはいられなかったが、それでもこの景色には深い興趣をそそられたのだった。

逃げだしてきた遊客たちは、あるものは木蔭で雨やどりするし、あるものはおしあいへしあい船に乗りこんでいる。許仙も、もし乗れる船があつたら船に乗ろう。雨があんまりひどすぎる、夕方までにはとてもやむまい、と思った。ちょうどそこへ、柳の木蔭から、簑をきたひとが、ヒョッコリ小船をこいできたのだった。

許仙はこれを見ると大よろこびで、傘をさしあげたがらよびとめた。

「船頭さん、その船にゃ客は乗せないのかい？」

船頭は船の艫の方でゆっくり櫂をおしていたが、

「乗せますだよ。だが、幾らかよいもらわなきゃね」

「そりゃそうだろう。こんな大降りだもの、幾らかよいもらうんでなきゃ、家にすつこんでたろうさ。清波門まで貸切りで幾ら？」

「じゃ、百文やつて下せえ」

「そいつは高すぎるぜ。かといつて安すぎちゃ承知すまいが、七十文じゃどうだい？」

「いいですだ。お前さん、ハッキリ云いなさるだな。お前さんをお客にするだよ」

そう云いながら、船頭が艫のほうで櫂を二かき三かきこぐと、船はそろそろ岸についた。艫が岸にとどくや否や、許仙は船にとび移った。かれはまだ傘をさしていたが、艫に立つと傘をすばめ、服をたくしあげて客席へ下りた。傘は艫においておいた。

こういう小さな瓜皮艇子には、まんなかに客席があ

るとはいうものの、それは寝台ぐらいの大きさしかなく、板を二三枚わたして、座席にしている。許仙は客席へ下りると、いちばん手前の板に腰をかけた。

「船頭さん、さア、船をだしておくれ！ この船はわたしが買い切ったんだから、ほかのお客を乗せちゃいけないよ」

「そりゃそうにきまつてるだ」

船頭がこう云いながら、襦をおこして、さてこぎだそうとしたときだった。だしぬけに柳の木蔭から、

「船頭さん、船頭さん！」

とよぶ声がする。船頭がふりかえってみると、ふたりの婦人だった。ひとりはい白い服、ひとりは青い服。豪雨におわれて、柳の木蔭に身を避けている。しかし、その柳の木にはふたりを庇えるだけの大きさがなかった。ふたりはむりやり雨をよけていたのだった。

「お客さん、この船にゃお乗せできねえだ」

「こんなたいへんな嵐になっちゃって、どこにも船がないんだもの。乗ろうにも乗れなかったのよ！ いまあんたの船がきてくれたなんて、これこそ天の助けだ

わ。ねえ、みてよ、娘のわたしたちが、びしょ濡れになっているの、なんとか乗せてって！」

「だがの、道が違うかもしれねえでな！ わしらは清波門まで行くだが、お前さん方はどこへ行きなさるだね？」

「まア、わたしたちも清波門へ行くの！」

許仙は客席に坐っていたのだが、この瓜皮艇子は、苦で屋根を覆ってあるだけで、まわりには全然蔽いがなかったから、岸にいるひとたちが見透しだった。で、そのふたりの婦人を見ると、いましがた西冷橋のほとりで行き遇った女たちだった。彼女たちも雨具をもっていなかった。ので、嵐に追われ、帰るに帰れなくなったひとたちにちがいない。

「船頭さん、船を着けて、おふたりをのせておあげよ。聞いてみりゃ、実際お気の毒だ」

「そりゃいいだがね、このお客さん方が船賃を出しても、お前さんが差引いちゃならねえだよ」

「えらく細かいんだな」と許仙はわらって、「あのひとたちが船賃を出したからって、あたしがどうして船

賃を差引けるんだい？」

「お前さん方、お客さんが承知しただから、乗るがええだ」

船頭はそう云いながら、船をそろそろ岸に寄せ、舳を柳の木あたりへ着けた。

「船頭さん」と許仙は云った。「ここに傘があるから、あの娘さんに渡しておあげよ。船を柳の下に着けたって、まだちょっと離れているから、この雨だもの、傘をさしてくるほうがいいだろう」

青服の婦人はこれを聞くと、白服の婦人の顔をうかがった。

「御親切に！」

と、白服の婦人は云った。

「どうぞお構いなく！」

青服の婦人は、これをきくと、ピョンとひととび、船にとび移った。彼女が舳に立って手をさしだし、白服の婦人はその手をかりて、かるくひとまたぎ、船にあがった。

このとき、ふりそそぐ雨はまるで篠つくよう、ふた

りは客席の入口で体をすりよせるようにしていたが、立ってもいられず、ちよつとそこを離れば、今度は雨に洗われるので、まったくどうしようもなくまごまごしていた。

「お嬢さん方、御遠慮には及びませんよ。ここには板が二枚ありますから、いいように坐ってください。わたしは傘をもっていますから、舳のほうでさしていたてかまわないんです」

そう許仙が云うと、白服の婦人は、

「ほんとうにおそれいます」

と云ったが、青服の婦人は、

「じゃ、わたしとお姉さまが一つに坐らせていただいて、あなたはもうひとつにお坐りになったら？ それでよろしいじゃございません？」

と云い、そう云ううちにも、ふたりは客席へ下りてきた。そこで許仙はたちあがって、

「ここはとても狭いから、いっしょじゃあなた方がなにかとお困りでしょう？」

「船や馬でこいっしょになれば、ひとつ家もおなじで

すわ。困るも困らないもないじゃございません？」

と青服の婦人が云うと、白服の婦人も、

「そうですわ、困るも困らないもございませんわ。いままで柳の蔭にふりこめられていて、もしこの船がきてくれなかったら、わたしたちはいまでもまだあそこで雨やどりしているんですもの、そのほうがずっと困りましたわ。あなたが舳のほうへお移りになるのなら、わたしたち、あちらへまいるほしかたありませんわね」

それで、許仙がまず挨拶して、

「じゃ、おっしゃるとおりにいたしましょう」

娘たちも、固くなって挨拶を返すと、板をまたぎ、こちらへ向いて腰を下した。許仙はいままでとおなじように外へ向いて腰を掛けたが、心中、ひそかにおもった。このひとたちはどうして外へ向いて坐らないのだろう？ やっぱり礼儀という気持からなのかしら？

しかし口には出さず、だまうつつむいていた。

雨はやや小降りになった。船頭は櫓をこぎはじめ、船はゆっくり進みだした。

娘たちは、許仙がいつまでも顔をあげないのを見て、

白い服を着ているほうが小聲で云った。

「小青、^{シヨウオン}あの方はとてもまじめな方ね。運よくこの船で送っていただけたけど、あの方のお名前が何で、何とおっしゃるのか、まだ知らないのよ。わたしたち、まるで礼儀知らずだわ！」

「そうでしたわね、あの方にうかがってごらんになったら？」

そこで白服の婦人が云った。

「あなたさま、わたしたち、まだお名前をうかがっていませんの。後になって、きょう嵐にあったときに、どなたにたすけていただいたのかと聞かれても、すぐこたえられませんから、とても失礼なことをしたって、わかってしまいますわ」

許仙はやつと顔をあげて笑った。

「こんなことじゃ、嵐でひとをたすけたことにはなりませんよ。名前をもうしあげれば、一字名で許仙といえます」

「では、許仙さまでございますのね。御当地の方？」

「はあ、錢塘チンタンのものです」

「御両親はお達者ですの？」

「ふたりとも亡くなりました。きょうは両親の墓参りに行った帰りなんです」

「御兄弟はお幾人？」

「兄弟はおりませんが、姉がひとりおります」

こうはなしあいながら、許仙は顔をあげて、白服の婦人をながめた。みれば、眉は三カ月がたに美しくとのい、ことにその両の瞳が、キラキラとかがやいている。髪は盤龍髻バンリウキに結っていたが、豪雨にあって崩れないで、まだ彩鳳サイフウ（一種の髪飾り）を一本挿していた。な

お、いましがた小青とよばれた娘のほうをみると、肉づきの程よい顔立ちながら、眉の間に幾分勝気らしい様子が見え、白服の婦人の、うりざね顔で、春風に顔をなぶられ、おのずから笑みをふくんでいるような風情はなかった。小青はときどき小さな口で舌打ちをすることがあり、姉のような親しみに欠けていた。

「あなたはいま」と白服の婦人は云った。「何をしておいでですの？」

「いまは藥屋の店で働いています」

「お年はおいくつ？」

「ことし二十歳です」

彼女がこんなふうにかまこま聞き出すのに、許仙はいやな気もせず、聞かれるままにこたえていた。

「それじゃ」と小青が云った。「わたしのお姉さまとおない年だわ。お年からいうと、もう御結婚しておいですわね。奥さまはお幾つ？」

「年は二十歳ですけど、まだ姉夫婦の世話にならなくちゃ暮していけないんですから、どうして、嫁をもらうどころじゃありません！」

小青はなかば向きをかえて、チラッと姉を見た。姉のほうは、恥ずかしそうに、自分の服の雨にうたれたあとをながめている。

「もうお姉さまにはお聞きすることがなくなりましたわ。あなた、なにかお姉さまにお聞きになることがあって？」

「ええ、まずお嬢さんのお名前をうかがわなくちゃ！」
許仙はこう云ったものの、どう後をつづけたらいい

やらわからなかった。みれば、聞かれた婦人のほうがおちついていて、大きな袖で腿のうえを覆いながら、こちらを見て微笑んでいる。

しかし小青は、姉が云うのを待たず、横合いから口を入れて、

「こちらは白素貞とおっしゃるの。四川の方で、お父さまは**兗州**（浙江省屬 水縣一帶）の**指揮**（司令官）をなさっておいででした。でも、お氣の毒なことに、御両親ともお亡くなりになって、お姉さまにはお身寄りがありません。お父さまが御在世中、いつも、杭州に親戚がいるんだと云っておいででしたので、わたしをつれて、ここへ御親戚を尋ねておいでになったんだけど、案に相違して、御親戚にめぐりあえず、まだお身寄りがなくていらっしゃるのよ。さあ、これでお嬢さまのお身の上はスッカリおはなししましたわ。ほかにお聞きになることあって？」

「ほう、じゃ、お家柄の方だったんですね！ 失礼しました」

許仙がこう云いながら、体をおこしてうやうやしく

おじぎをすると、白素貞もいそいそでおじぎを返した。「御親戚にお会いになれないんじゃ、杭州へおいでになってもずいぶん寂しいことですね！」

白素貞は、そうだと答えると、袖で腿のうえをトンとたたいた。

「許仙さま」と小青は云った。「あなたも身寄りのない方だし、お嬢さまも身寄りのない方で、おたがいつがいの『あわれな虫』みたいですね」

「わたしなんか、お嬢さまのひきあいになるもんですか！ いやもう、わたしは不倖せに生れついているんで、一生涯、芽のでるときなんかありゃしません」

このころには、白素貞が船に乗ったときよりも、雨は、かなり小降りになっていた。西湖を見渡すと、淡いもやがだんだんぬぐわれて、木立の繁った蘇堤と白堤がもうハッキリあらわれている。西湖には霧雨が降っていたが、水煙は次第に薄れてゆき、三潭印月（西湖の名勝）も阮公墩（同上）も眺められた。霧雨にぬれる木立や、霧雨をはらんだ雲が、船の上をゆっくり通り過ぎてゆく。こうして西湖はすでに、驟雨の中に煙っていたの

である。

「西湖はほんとにいいわね」と小青は云った。「ひどい雨の前も後も、それぞれいい眺めですわ。許仙さま、少し遊んでおいでになりませんか？」

「霧雨がまだだいぶ降っていますから、まアよしときましよう。それに奉公人の分際で、一日暇をもらったんですから、早く帰ったほうが何かと云われずにすみます。やっぱり帰らなくちゃありません」

白素貞は肯いた。こう話しあっているうちに、船はもう清波門外に着き、船頭はそろそろと岸へ寄せかけた。

小青は白素貞のそばに立ちあがっていたが、白素貞がポケットから銭をとりだしてわたすと、客席を手をつきながら出て行って、その銭を船頭にやった。

「この船、許仙さまとの約束は七十文だったわね。わたしたちが乗ったから、三十文おまけするわ。みんなで百文、船板のうえにおいとくから調べて頂戴！」

そういつて、また手をつきながらもどってきた。これを聞いて許仙がふりかえってみると、船頭は艫でそ

の百文の銭を数えていた。櫂は両方とも水のなかに入れっ放して、漕いでいない。

「おいおい、船頭さん、船賃の七十文はわたしが払うんだ、お嬢さんからもらっちゃいけないよ」

「よろしいんですのよ」と白素貞は云った。「お氣をおつかいにならないで」

船頭は両手に百文の銅銭をもって数えてしまうと、笑いながら、

「このお嬢さん方ア、ほんとにハッキリしていなさるだ。ちゃんともらやア、どっちからもらおうとおなじですだよ」

そこで許仙は礼を云った

「こりやどうも恐縮でした」

船頭は艫から他の船にとび移り、舳にまわって、そこに用意してあった麻縄をもって岸にあがると、柳の幹に縄をくくった。

「さア、船をつなぎましただ、あがって下せえ！」

許仙は白素貞がまた指で二度空をさすのを見たが、これがどういふことなのかわからなかった。しかしも